

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20700483
 研究課題名（和文）
 体育授業における学習の勢いと肯定的な学習の雰囲気を保障する指導方略の実証的研究
 研究課題名（英文）
 Examination of Teaching Skills and Strategies to Invent Momentum and Positive Climate
 in Physical Education Class
 研究代表者
 米村 耕平（YONEMURA KOHEI）
 香川大学・教育学部・准教授・
 研究者番号：20403769

研究成果の概要（和文）：本研究では、学習の勢いを高めるための指導方略、肯定的な学習の雰囲気を生み出すための指導技術、指導方略を、附属小学校教員の体育授業と教育実習生が行う体育授業に適用し、それらの有効性や附属小教員と大学院生の指導力の差異について学習の勢いと雰囲気を示すデータから実証的に検証した。その結果、学習の勢いを高めるための指導方略、肯定的な学習の雰囲気を生み出すための指導技術、指導方略の有効性および附属小教員と大学院生の指導力の差違が授業データから明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the effectiveness of the teaching skills and strategies to invent momentum and positive climate of physical education class. Main findings were as follows:

- 1) The effectiveness of the teaching skills and strategies to invent momentum and positive climate were clarified by the collected data.
- 2) The difference of primary teacher and student teacher's teaching ability was clarified by the collected data.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：体育科教育学

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：指導方略、学習の勢い、学習の雰囲気

1. 研究開始当初の背景

体育授業場面における教師行動や学習行動は外部から鮮明に観察できる部分が多く、また、これらの行動と学習成果との関係についても比較的容易に分析できるため、授業観察を通して授業改善に有益な示唆を得ることができる。そのため、アメリカを中心にさまざまな組織的観察法が開発され (Darst et al., 1983, 1989), これらを適用した体育授業研究が数多く行われてきた (Piéron & Cheffers, 1988; Schempp et al., 1996; Silverman & Ennis, 1996; Templin & Olson, 1983)。

わが国でもこのような組織的観察法を適用するとともに、特に児童の授業評価との関係を分析することによって、よい体育授業の過程的特徴を明らかにする研究が行われてきた。そして高橋は、これらの研究結果を総括して、子どもが評価するよい体育授業を実現するための基礎的条件として①学習従事時間の確保や学習規律の確立によって生み出される学習の勢いと、②学習者の情緒的解放や教師および学習集団の肯定的な関わりによって生み出される学習の雰囲気との2つが特に重要であると指摘した (高橋, 2000)。さらに筆者らは、学習の勢いと学習の雰囲気について研究を行い、学習の勢いと学習の雰囲気が児童の授業評価に与える有効性と影響力を実証的に検証した。その結果、学習の勢いと肯定的な学習の雰囲気が児童の授業評価と正の相関関係にあること、そして、学習の勢いと学習の雰囲気が児童の授業評価の75%を規定していることを明らかにした (福ヶ迫ほか, 2003; 米村ほか, 2004; Yonemura et al., 2004)。

以上のように、児童が評価するよい体育授業

の過程的特徴として、学習の勢いと肯定的な学習の雰囲気が現れることが確認されてきたが、この学習の勢いと肯定的な学習の雰囲気を保障するための指導方略については、十分検討されているわけではない。確かに、過去にも授業研究の結果にもとづきよりよい授業の実現に向け、学習の勢いと学習の雰囲気に関わった様々な指導技術や指導方略が国内外で提案されてきた (深見ほか, 1997, 2000; 日野ほか, 1997; Metzler, 2000; 中井ほか, 1994; 高橋ほか, 1989b, 1991, 1996b, 1997; Rink, 2002; Siedentop & Tannehill, 2000)。しかし、ここで提案された指導技術や指導方略の多くは、論理的に考えてその有効性が推察できるものの、必ずしも実証的研究によって検証されたものではなかった。

そこで米村ら (2005) は、学習の勢いと肯定的な学習の雰囲気が確保され、授業評価の高かった4授業を分析し、そこで適用されている指導技術や指導方略について検討した。その結果、学習の勢いを高めるための指導方略として①学習時間の確保に向けた学び方と学習規律の指導、②具体的な学習目標 (めあて、課題) の提示、③効果的な教材・下位教材の適用、④学習支援装置の適用が、また、肯定的な学習の雰囲気を生み出すための指導技術や指導方略として⑤積極的な相互作用、⑥社会的態度の強調とその実現に向けた課題の設定と学習形態の採用が推定された。しかしながら、上記の結果は、学習の勢いと肯定的な雰囲気が確保されている体育授業の過程的特徴として現れる指導方略や指導技術を明らかにしたのであって、これら指導方略の適用がたちまち学習の勢いと肯定的な学習の雰囲気を生み出すことを証明するものではない。したがって、これらの指導技

術や指導方略が、体育授業における学習の勢いと肯定的な学習の雰囲気を実際に生み出すことができるのか、体育授業実践に仮説実験的に適用し実証する必要がある。

これらの指導方略の有効性が検証されれば、体育授業実践を改善していく上で有効な、そして具体的な手だてが明らかになる。これらの手だては、現職教員の授業実践の改善のみならず、授業実践の初心者である教育実習生の体育授業実践の改善に大きく寄与することが考えられる。

2. 研究の目的

そこで本研究では、学習の勢いを高めるための指導方略である①学習時間の確保に向けた学び方と学習規律の指導、②具体的な学習目標（めあて、課題）の提示、③効果的な教材・下位教材の適用、④学習支援装置の適用、肯定的な学習の雰囲気を生み出すための指導技術、指導方略である⑤積極的な相互作用、⑥社会的態度の強調とその実現に向けた課題の設定と学習形態の採用を附属小学校教員の体育授業と大学院生が行う体育授業に適用し、それらの有効性や附属教員と大学院生の指導力の差異について学習の勢いと雰囲気を示すデータから実証的に検証する。

3. 研究の方法

(1) 研究対象

2008年11月25日～2009年2月10日まで行われた附属教員2名と大学院生3名の体育授業を対象とした。

(2) 観察分析の方法

対象となる授業における教師行動と学習者行動は2台のビデオカメラを用いて撮影された。学習の勢いについては、授業時間中に占める運動学習場面の時間を観察記録する「体育授業場面の機関記録法」と、運動学習場面における学習従事の割合を観察記

録する「学習従事観察法」を適用し、学習の雰囲気については、学習者の人間関係行動と情意行動を観察記録する「人間関係行動・情意行動観察法」を適用して観察・分析を行った。指導方略の適用については、対象授業における教師行動を記録し、指導方略適用の有無を確認した。また、体育授業の評価については、「体育授業の形成的授業評価票」（高橋，1994）を適用し児童が満足する授業であったかどうか検討する。

4. 研究成果

附属小教員と大学院生の授業を比較した結果、以下に示す指導方略および指導技術において附属小教員の適用数が多くなる傾向が認められた。

- ①学習時間の確保に向けた学び方と学習規律の指導
- ②具体的な学習目標（めあて、課題）の提示
- ③効果的な教材・下位教材の適用
- ④積極的な相互作用
- ⑤社会的態度の強調とその実現に向けた課題の設定と学習形態の採用

そのため、附属小教員の体育授業は、大学院生の授業と比較して、子どもの形成的授業評価が高く、学習の勢いを示す運動学習時間が多く、学習に従事する子ども割合も高くなった。くわえて、学習の雰囲気を示す子どもたちの肯定的人間関係行動、肯定的情意行動が多く出現することが明らかになった。

以上から、学習の勢いを高めるための指導方略である①学習時間の確保に向けた学び方と学習規律の指導、②具体的な学習目標（めあて、課題）の提示、③効果的な教材・下位教材の適用、肯定的な学習の雰囲気を生み出すための指導技術や指導方略である④積極的な相互作用、⑤社会的態度の強調とその実現に向けた課題の設定と学習形態の採用の適用が、体育授業における学習の勢いと

肯定的な学習の雰囲気を実際に生み出すことが実証された。

また、附属小教員と大学院生との間に明確な指導力に差があることが明らかになったことから、これらの指導方略や指導技術を体育授業に適用する力を身につけることによって大学院生の授業改善の可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

米村耕平ほか、体育授業における学習の勢いと肯定的な学習の雰囲気を保障する指導方略の検討ー附属小教員と大学院生の比較からー、日本スポーツ教育学会第29回大会、長崎大学、2009年11月8日

6. 研究組織

(1)研究代表者

米村 耕平 (YONEMURA KOUHEI)

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：20403769